

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月15日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530909

研究課題名（和文）近代日本の洋楽受容期における音楽鑑賞観の形成と位相

研究課題名（英文） Formation and Phases of Concepts of Music Appreciation
in Modern Japan

研究代表者

寺田 貴雄（TERADA TAKAO）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00322868

研究成果の概要（和文）：近代用語としての音楽鑑賞関連用語の意味の形成を探るために、近代辞典（35点）の掲載語を調査した。当時の書籍、雑誌、新聞から、音楽鑑賞関連の言説を収集した。近代日本の音楽鑑賞観の形成と変化は、次の3つの社会的文化的事象と緊密に関連していることが明らかになった。①演奏会の増加 ②蓄音機、ラジオの普及 ③学校での音楽鑑賞教育の展開

研究成果の概要（英文）：In order to investigate into the modern term concerned with music appreciation, 35 dictionaries were searched. Discourses on music appreciation were picked up from books, magazines, newspapers at that time. Formation and change of views of music appreciation, it has been closely associated with social and cultural events. Those events are: ①increasing number of concerts, ②dissemination of radio and gramophone, ③deployment of education in music appreciation at school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：音楽教育学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：音楽鑑賞、洋楽受容、音楽教育史、音楽教育学、近代用語

1. 研究開始当初の背景

日本の洋楽受容史の研究は近年盛んになってきたが、音楽鑑賞観の形成に焦点化した研究はほとんど行われていなかった。

音楽教育史研究の分野において、学校教育の音楽鑑賞指導の史的研究については、音楽教育

者個人を対象とした研究は比較的多いが、それらは、教育実践家の学校における鑑賞指導の研究に限定されており、「社会における人々の音楽意識」に着目した研究は未開拓の領域であった。

一方、知識人による大衆への音楽鑑賞の啓蒙活動に関するものには、研究代表者による数件

の研究があった。これらの研究では音楽鑑賞の大衆への啓蒙の具体的主張内容と、その思想的背景について論考している（寺田貴雄「田邊尚雄の音楽鑑賞論—「音楽の聴き方」（1936）を中心として—」『音楽教育学』第27-2号）。更に、明治後期の言説資料から音楽観、音楽鑑賞観を抽出・分析することを試みた研究（寺田貴雄「明治後期における洋楽普及と雑誌『趣味』『エリザベト音楽大学研究紀要』第19号」）は、本研究の予備的研究に位置づけられる。本研究は、これらの先行研究の研究手法を用い、分析対象とする言説資料を拡大し、より多面的に音楽鑑賞観の形成過程に迫ろうとしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、明治中期から昭和初期に至る西洋音楽受容期における音楽鑑賞観の形成過程およびその位相を、当時の言説資料から〈音楽を聴くこと〉への人々の意識を抽出・分析することによって明らかにしようとするものである。

幕末から明治維新にかけて日本に入ってきた西洋音楽は、明治中期から後期に公開演奏会が徐々に増加することによって、少しずつ浸透していった。けれども殆どの日本人にとって、耳慣れない西洋音楽は理解し難い不思議なものであったに違いない。このような、西洋音楽に対する疑問は、音楽を客体として認識し味わおうとする意識、即ち「音楽鑑賞」の意識の萌芽であると言える。さらに、多くの日本人が持っていた疑問に答えるように、「音楽とは何か」「いかに音楽を聴くか」といった知識人による大衆への啓蒙活動を生み出していく。

西洋音楽が浸透していく大きな契機として、（1）市中での演奏機会の増加、（2）蓄音器レコードやラジオの普及、（3）学校における音楽教育の発展があるが、これらはそのまま音楽鑑賞観の形成に大きな影響を与えた社会事象として位置づけられる。当時の言説資料には、これら社会事象に刺激されて音楽について語られた言説が少なくない。従って、当時の言説資料から人々の〈音楽を聴くこと〉への意識が垣間見られる言説を抽出し、それらの言説内容を分析検討することによって、当時の音楽鑑賞観の諸相を明らかにすることができる。

本研究では、異文化としての西洋音楽に出会った明治期の人々が〈音楽を聴くこと〉を意識し徐々に音楽鑑賞という観念が形成されていく過程を、（1）市中での演奏機会の増加、（2）蓄音器レコードやラジオの普及、（3）学校における音楽教育の発展という社会事象との関連において明らかにしようとした。また、社会における多様な人々がその立場によってどのよう

な音楽鑑賞観を形成したのかを、当時の音楽思想、教育思想、大正デモクラシー思想などとの関連において考察した。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、以下の2段階5項目の内容を実施した。

(1) 言説資料の収集と整理

- ① 言説資料の収集の範囲を限定するために、「音楽」「鑑賞」他の用語について定義する。
- ② 明治中期から昭和初期に刊行された書籍、雑誌、新聞、その他に掲載された音楽関連記事・論説から音楽鑑賞に関わる言説を検索・収集する。
- ③ 検索・収集した音楽鑑賞に関わる言説をデータベース化する。

(2) 音楽鑑賞観の抽出と分析

- ④ 検索・収集した各言説にみられる音楽鑑賞観を抽出し、当時の芸術思想、教育思想、大正デモクラシー思想との関連性を考察する。
- ⑤ 上記④で抽出した音楽鑑賞観の形成と社会的文化的事象との関連をより明確にするために、とりわけ3つの事象（市中での演奏機会の増加、蓄音器レコードやラジオの普及、学校における音楽教育の発展）と音楽鑑賞観の影響関係を分析解釈する。

4. 研究成果

(1) 音楽鑑賞関連用語の設定

近代日本の音楽鑑賞に関する用語を整理するために、明治中期から昭和初期に刊行された辞典類35点を調査した。このうち新語辞典類は26点であり、これには、「尖端」や「モダン」といった言葉を書名にもつ流行語辞典の他に、文芸辞典、外来語辞典などの専門辞書や、「ユーモア」「漫画」といった言葉を書名にもつ、ややくだけた辞書も含まれる。調査対象年代の初めの時期、大正初期の段階で、世の中に定着している言葉の状況を知るために、国語辞典も4点調査した。また、音楽辞典も2点含めている。新語辞典類の全掲載項目を概観し、音楽鑑賞に関連すると考えられる用語を抽出し、掲載項目群とした。あらかじめ調査する用語を決めて探索するのではなく、辞典類の掲載語の中で音楽鑑賞活動へのつながりが想起される言葉を抽出して行くという方法をとった。心理学・哲学用語や芸術思想に関わる用語については、見方によっては全てが音楽鑑賞に関わるとも言えるため、網羅的に選択するのではなく、音楽鑑賞活

動に、より緊密であると考えられる言葉を、選択した。

国語辞典、音楽辞典については、新語辞典類から作成した項目群の各用語について、調査した。

このようにして抽出した掲載項目群の用語を、次の五つ、①〈音楽を聴くこと〉関連の類語 ②鑑賞関連の美学概念・芸術思想 ③心理学・哲学用語 ④音楽鑑賞のメディア ⑤音楽鑑賞と社会、に分類した。

①〈音楽を聴くこと〉関連の類語は、27 用語であった。「鑑賞」「翫賞」「情趣」「趣味」「美感」「微妙」「味解」などの他に、「アプリーション」や「テスト」といった英語やその訳語も含まれている。

②鑑賞関連の美学概念・芸術思想は、60 用語であった。「アート」「音楽」「観照」「形式」「芸術美」「審美」「美的快感」「批評」などの他に、文学の領域で当時流行していた用語も多く含まれている。

③心理学・哲学用語は、「感覚」「感受性」「感情移入」「直感」「認識」「理解」などの 13 用語であった。西欧語の学術用語を邦訳する際、新たに作られた言葉が多い。

④音楽鑑賞のメディアには、17 用語であり、ここには、「蓄音器」「ラジオ」や、「ピアノ」、「オートピアノ」などの自動演奏楽器が含まれている。特に昭和初期の新語辞典には、蓄音器の商品名である「エレクトローラ」や「オルソフォニック・ヴィクトローラ」や、レコード会社名の他、ラジオ番組の種類も掲載されており、新しいメディアに関する用語への社会の強い関心がうかがえる。

⑤音楽鑑賞と社会は、「教養」「芸術教育」「修養」「美的態度」「文化生活」などの 13 用語であった。ここには、明治後期の文化への「高級」「低級」の視点や、大正期文学の影響による「美的生活」なども含まれている。

(2) 音楽鑑賞に関わる言説の収集

明治中期から昭和初期にかけての、書籍、雑誌、新聞を調査し、音楽鑑賞に関わる言説を収集した。

①書籍

小川昂『洋楽の本 明治期以降刊行書目』(1977～) および国立教育研究所編『教育文献総合目録第 1 集 明治以降教育文献総合目録 付・総索引』(1976) を中心として、各種データベースでの探索および、国立国会図書館近代デジタルライブラリーの探索も追加し、検索した書籍を調査した。

②雑誌

『音楽雑誌』『音楽』『音楽界』『音楽新報』『音楽世界』『音楽と蓄音機』『芸術教育』『教育音楽』など、20 タイトルの音楽・音楽教育関係雑誌を調査した。

『学習研究』『教育学术界』『教育研究』『教育論叢』『小学校』『婦人と子ども』など、21 タイトルの教育関係雑誌を調査した。

『趣味』『白樺』『早稲田文学』など、4 タイトルの文芸雑誌を調査した。

③新聞

『東京日日新聞』『東京音楽新聞』『都新聞』の 3 タイトルを調査した。

(3) 近代日本の社会的文化的事象と音楽鑑賞観との関連

収集した言説から音楽鑑賞観を抽出し分析する作業は、膨大な言説数による作業の遅れから、当初の計画通りには進行しなかった。けれども、美学における鑑賞概念および、「趣味」「taste」との関連については、近代日本の音楽鑑賞観を形成する上で重要な要素であることを明らかにすることができた。

また、社会的文化的事象との影響関係については、詳細な分析はこれからだが、その概要は示すことができる。以下の通りである。

【音楽ジャーナリズムの出現と鑑賞意識の萌芽】

明治中期には公開演奏会が増加するとともに、雑誌創刊ラッシュを迎えた。1890 (明治 23) 年 9 月に創刊された日本最初の音楽専門誌『音楽雑誌』には、洋楽を受容し始めたばかりの読者に向けて、音楽の効用などを説き、社会における必要性を強調した論説が、しばしば掲載されている。1892 年 8 月に掲載された鳥歌散史「音楽と学生」では、音楽の効用を強調する一方、「世上靈妙なる音楽」を「心耳を傾け」て聴取することが述べられている。このような文章にふれた読者は、聴き慣れない耳に馴染まない西洋音楽であっても、演奏される楽曲を聴取の対象として意識するようになっていったと思われる。このような意識は、音楽鑑賞意識の萌芽と考えることができる。また、西洋趣味の普及を目指した趣味教育の一環としての洋楽の啓蒙活動に音楽鑑賞の意識をみることもできる。

【音楽鑑賞団体の増加と〈鑑賞〉〈聴き方〉への注目】

明治 30 年代から 40 年代には、洋楽邦楽ともに、鑑賞団体が続々と結成され、演奏会が開催される数も増加した。その中で、日比谷公園の音楽堂での演奏会は、洋楽の大衆化の上で重要な演奏会であった。1905 (明治 38) 年 8 月から毎月開催されたこの演奏会は、陸海軍の軍楽隊が交互に出演し、当時の最高水準の洋楽を聴くことができる演奏会であった。その盛況ぶりは当時の雑誌、新聞記事からも伺い知れる。「日比谷の公園奏楽」として市民から親しまれた演奏会は、音楽愛好者を増加させ、洋楽の大衆化に

貢献したのだった。人々の音楽への関心の高まりとともに、1907（明治40）年頃から一般愛好家向けの洋楽の解説書が多数出版されるようになった。それらの多くは楽典や音楽史の知識、楽器の解説などに多数の頁を割いているが、所々に〈鑑賞〉や〈聴き方〉に関する記述がある書物もいくつか現れている。例えば、東儀鉄笛『音楽通解』（1907）は、管弦楽の鑑賞を例に、音楽聴取の過程を段階的に述べている。この書は、洋楽鑑賞の啓蒙書として当時多くの人々に愛読されていた。また、前田久八『洋楽手引』（1910）も、鑑賞に必要な事項を平易に解説することを目的の一つとして書かれたものである。

音楽関係雑誌にも、明治40年代以降、鑑賞に関する記事が多くなっている。明治40年1月2月『音楽新報』に掲載された小林愛雄「音楽鑑賞法」は、当時アメリカの代表的な音楽鑑賞の啓蒙書であったH. E. クレービールの著作をもとに書かれている。明治43年11月『音楽世界』（京都十字屋田中商店）に掲載された「音楽不可解論」は、当時の聴衆にとっての音楽鑑賞の困難さを嘆いた記事である。また、同じく『音楽世界』に明治44年2月に発表され、音楽構造の聴取の重要性を強調した田辺尚雄「音楽の鑑賞法」など、明治末期から大正にかけて鑑賞に関する多くの言説が登場している。

【蓄音機・レコードの普及と学校における音楽鑑賞教育の提唱】

社会における〈鑑賞〉への高まりに比べ、明治期における学校の唱歌教育の分野では、鑑賞についての記述はほとんど見られない。1902（明治36）年の新清次郎『小学校唱歌教授法』では、音を聴くことに注目しているが、それはあくまでも唱歌の学習過程における音の聴取であり、鑑賞への意識は感じられない。同様の傾向は1908（明治41）年の大槻貞一『如何に唱歌を教ふべきか』にも見られる。

1910（明治43）年7月8日に東京音楽学校校友会誌『音楽』に掲載された牛山充「学校に於ける鑑賞力と批判眼との養成」は、音楽鑑賞教育が主題として取り上げられ、タイトルにも「鑑賞」が明示された最初の文献である。ここでは、真に音楽を理解できる聴衆を育てるために中等教育以上の学校における音楽鑑賞教育を提唱したものである。牛山の鑑賞教育論が目指したのは、音楽批評の能力を備えた聴衆の育成であった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①寺田貴雄、近代日本の音楽教育言説にみる taste としての「趣味」、北海道教育大学紀要教育科学編、査読無、第63巻第1号、2012、全10頁（印刷中）

〔学会発表〕（計2件）

①寺田貴雄、近代日本の音楽鑑賞概念の研究1—〈音楽を聴くこと〉における「趣味」の意味とその背景—、日本音楽教育学会第42回大会、2011年10月22日、奈良教育大学

②寺田貴雄、近代新語辞典にみる音楽鑑賞関連用語—流行語としての〈音楽を聴くこと〉の輪郭—、日本音楽教育学会第40回大会、2009年10月3日、広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺田 貴雄 (TERADA TAKAO)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00322868